東亜同文書院大旅行調査における台湾訪問ルート

The Taiwan Routes in The Great Journeys of Toa Dobun Shoin College

岩田　晋典

IWATA Shinsuke

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: shinskeiwata@gmail.com

Abstract

The Great Journeys were months-long field researches conducted from 1907 to 1944 by Toa Dobun Shoin College students as completion of their study. While the trips were carried out mostly in the Chinese continent, only limited number of research teams passed or visited Taiwan, a Japanese colony at that time. By extracting the data of groups that visited the island, this paper considers several key aspects in understanding of the Taiwan routes. The analysis shows firstly that Taiwan constitutes the important part of the Southern destinations of the Great Journeys, especially as the main gateway to the Philippines and further south. Secondly, the port of Keelung had played an important role in the routes to the greater extent than the port of Kaohsiung. Finally, Taiwan was frequently visited at the end of the journeys and its Japanese-ness under the colonial rule appears to have functioned as a sort of reward for those who succeeded in carrying out the hardship of the long fieldwork in foreign countries.

Ⅰ．はじめに

本稿の目的は、東亜同文書院学生（以下書院生）による大旅行調査における台湾訪問について理解を深めるために、調査ルートの側面から分析を行うことにある。

大旅行調査は、書院生が卒業時に 3 ヶ月から 6 ヶ月をかけて長期間実施したフィールドワークであり、第 5 期生（1907 年）から第 44 期生（1944 年）まで 37 年間行われ、調査の総数は約 700 に達している（藤田、2012：136-137）。そのうち台湾を訪問したルートは、大旅行調査全体の 1 割強となっている（岩田、2015：62）。本稿では、台湾を訪問した全ルートを明らかにすると同時に、ルートの構成や班の名称などの面から台湾訪問のあり方を把握することを試みたい。

なお、ここでいう「訪問」とは、主要な調査対象として台湾を訪れた場合だけではな

く、通過や立寄りと呼ぶべきものや、あるいは以下に述べるようなかろうじて台湾上陸が判断できる場合も含めた、幅広いものを指している。ルート上に来台が見出しうるものを全て「訪問」と呼んでいる。

以下では第一に研究の方法として二つの表について述べた後、台湾訪問ルートの推移、フィリピンなどの南方方面調査の関わり、基隆港の位置付け、大旅行調査における台湾訪問の意味合いについて、適宜今後の課題を示しつつ論じていく。

Ⅱ．研究の方法

本稿では、オンデマンド版として復刻されている『東亜同文書院大旅行誌』（第 5 期生・1907 年から第 40 期生・1942 年までの計 33 巻）の記載内容を分析の対象とした。第 17 期生と第 37 期生、そして第 41 期生以降の大旅行誌は復刻されていないか、もしくは存在しておらず、利用不可能である。

表 1 は、大旅行誌の記録を元に、台湾を経由したルートの数を年度（期）ごとに分けて示したものである。ルートの計算は、旅行班の一部が分離したことが明白な場合は一ルートとして計算した[1)]。たとえば第 40 期生・1942 年の「第 38 班（香港）」がそれに該当する[2)]。この班は、名目上は同一の班でも実際は違うルートで行動しており、報告書も別のものが作成されている。なお、ここで言う「報告書」とは、各班が作成した旅行記録のことであり、大旅行誌各巻を構成する個々のレポート（もしくは日記、トラベローグ）を指している。

表－１　大旅行誌に記載された台湾訪問ルート数

期	旅行年	書名	全ルート数	台湾訪問ルート数
5	1907	大旅行誌１　踏破録	17	0
6	1908	大旅行誌２　禹域鴻爪	12	1
7	1909	大旅行誌３　一日一信	15	1
8	1910	大旅行誌４　旅行記念誌	12	0
9	1911	大旅行誌５　孤帆雙蹄	12	1
10	1912	大旅行誌６　樂此行	11	2
11	1913	大旅行誌７　沐雨櫛風	10	0
12	1914	大旅行誌８　同舟渡江	11	1
13	1915	大旅行誌９　暮雲暁色	11	1
14	1916	大旅行誌 10　風餐雨宿	13	2

1）この計算は荒武にならっている（荒武、2015：8）。4）大陸だけではなく東南アジアも含めた大旅行の地理的範囲における台湾の位置づけについては今後の課題とする。

2）以下の記述において「第 28 期生・1931 年」というように期番号と西暦を続けて記した場合、西暦はすべて大旅行調査の実施年を示す。

15	1917	大旅行誌 11　利渉大川	15	3
16	1918	大旅行誌 12　虎風龍雲	14	2
17	1919	（第十七期生）	欠	-
18	1920	大旅行誌 13　粤射隴游	23	5
19	1921	大旅行誌 14　虎穴龍頷	22	1
20	1922	大旅行誌 15　金聲玉振	22	4
21	1923,24	大旅行誌 16　彩雲光霞	17	2
22	1925	大旅行誌 17　乗雲騎月	19	3
23	1926	大旅行誌 18　黄塵行	15	1
24	1927	大旅行誌 19　漢華	17	4
25	1928	大旅行誌 20　線を描く	15	2
26	1929	大旅行誌 21　足跡	19	3
27	1930	大旅行誌 22　東南西北	20	1
28	1931	大旅行誌 23　千山萬里	20	5
29	1932	大旅行誌 24　北斗之光	27	1
30	1933	大旅行誌 25　亜細亜之礎	32	2
31	1934	大旅行誌 26　出盧征雁	26	1
32	1935	大旅行誌 27　翔陽譜	22	3
33	1936	大旅行誌 28　南腔北調	25	4
34	1937	大旅行誌 29　嵐吹け吹け	29	8
35	1938	大旅行誌 30　靖亜行	30	4
36	1939	大旅行誌 31　大旅行紀	21	1
37	1940	（第三十七期生）	8	0
38	1941	大旅行誌 32　大陸遍路	32	10
39	1942	大旅行誌 32　大陸遍路	欠	-
40	1942	大旅行誌 33　大陸紀行	38	1

注：総路線数は（荒武、2015）を参考にした。

つぎに、ルートの同定方法について整理したい。第一に、各班が作成した報告書の多くは冒頭に訪問地名が順番にまとめて記載してあるので、そこに台湾に関する地名があるものを一つのルートとして数えた。また、第 16 期生・1918 年の「農工科四班」のように、訪問地一覧には載っていないものの併記の地図に台湾訪問が記されていることもあり（図１）、その場合も訪問したものとしてカウントした。さらに、第 26 期生の三つの班にように、訪問地一覧や地図からは判別できないが、報告書の記述内容から訪問が分かる場合も、訪問したものとして数えた。そして、第 34・36・38・40 期生の各大旅行誌のように、当該年度の全大旅行調査班のルートが「旅程表」や「行程表」もしくは「予定表」として記録されている場合、台湾の地名が記載されているルートは台湾を訪問したものとみなしている[3)]。

3）台湾訪問が「予定」だったのか実際になされたのかの違いは重要な問題である。しかしながら、ここでは大旅行への台湾の組み込みの概要について理解を深めるために、単に「訪問」として扱うことにした。より詳しい分析は今後の課題としたい。

図１　第 16 期生・1918 年「農工科四班」の調査ルート

表－２　台湾訪問ルート一覧

期	旅行年	全ルート数	台湾訪問ルート数	班名	報告書での扱い	香港通過	訪問順序	台湾前	入台地	出台地	台湾後	一覧内での扱い
6	1908	12	1	楚粤班	言及のみ	○	終盤	香港	不明	不明	不明	(無)
7	1909	15	1	漢口厦門班	言及のみ	×	終盤	厦門	不明	不明	不明	(無)
9	1911	12	1	汕頭広州湾班	○	○	終盤	厦門	淡水	基隆	上海	(無)
10	1912	11	1	寧波厦門班	言及のみ	○	終盤	厦門	不明	不明	不明	(無)
			2	香港北海班	○	○	終盤	厦門	高雄	基隆	琉球・門司	(無)
12	1914	11	1	広東班	○	○	終盤	香港	不明	不明	不明	○
13	1915	11	1	江西東線班	○	○	終盤	香港	基隆	不明	上海	○
14	1916	13	1	広西班	言及のみ	○	終盤	香港	不明	不明	不明	×
			2	江西福建班	○	○	終盤	厦門・香港	基隆	基隆	門司・上海	○
15	1917	15	1	福建香港班	○	○	終盤	香港	基隆	基隆？	上海	○
			2	貴州班	○	○	序盤	福州	基隆	基隆	厦門	×
			3	雲南班	○	○	序盤	福州	基隆	基隆？	厦門	○
16	1918	14	1	農工科四班	言及のみ	×	終盤	福州	基隆	不明	不明	×(図にあり)
			2	両広湖南班	○	○	序盤	福州	基隆	高雄	厦門	○
18	1920	23	1	南方移民班	○	○	終盤	厦門	不明	不明	福州	○
			2	南支仲立商業調査班	○	○	序盤	福州	基隆	基隆	厦門	○
			3	化学工業及原料調査班	×	○	終盤	広東	不明	不明	上海	○(図に無し)
			4	湖南水運班	○	○	序盤	福州	基隆	基隆	厦門	○
			5	南方経済班	言及のみ	○	終盤	香港	基隆	不明	上海	○
19	1921	22	1	南溟航運調査班	×	○	終盤	マニラ	不明	不明	上海	○
20	1922	22	1	江西広東蒸業調査班	言及のみ	○	終盤	厦門	高雄	基隆	福州	○
			2	粤漢沿線経済調査班	×	×	序盤	福州	基隆	基隆	厦門	○
			3	南支水産業調査班	言及のみ	○	終盤	厦門	基隆	基隆	日本	○
			4	広東駐在商業調査班	○	○	序盤	福州	基隆	基隆	厦門	○

21	1923,24	17	1	南支沿岸産業調査班	×	○	序盤	福州	不明	不明	厦門	○
			2	南支沿岸産業貿易班	○	○	終盤	香港	基隆	基隆？	福州	○
22	1925	19	1	広東江西調査班	○	○	序盤	福州	基隆	基隆	厦門	○
			2	印度支那調査班	×	○	序盤	上海	不明	不明	香港	○
			3	南洋華僑調査班	×	○	後半	厦門	基隆	不明	マニラ	○
23	1926	15	1	広東三角州班	×	○	終盤	香港	不明	不明	不明	○
24	1927	17	1	南洋諸島班	×	○	終盤	汕頭	基隆	不明	上海	○
			2	南支沿岸経済調査班	×	○	終盤	広東	不明	不明	上海	○
			3	南支港勢調査班	×	○	終盤	香港	基隆	基隆	上海	○
			4	南支沿岸経済調査班	言及のみ	○	終盤	香港	不明	不明	上海	○
25	1928	15	1	華南滇越経済調査班	○	○	終盤	香港？	高雄	基隆	福州	(無)
			2	仏領印度支那東京経済調査班	○	○	終盤	香港？	基隆	基隆	不明	×
26	1929	19	1	(不明：華南沿岸)	言及のみ	○	終盤	厦門	不明	基隆	日本？	(無)
			2	(不明：華南沿岸)	○	○	序盤	福州	基隆	基隆	厦門	(無)
			3	(不明：東南アジア)	○	×	序盤	福州	基隆	基隆	マニラ	(無)
27	1930	20	1	南支沿岸仏領インドシナ調査班	○	○	序盤	福州	基隆	基隆	厦門	○
28	1931	20	1	南支沿岸遊歴班	○	○	前半	マカオ	不明	不明	福州	○
			2	南支印度支那遊歴班	○	○	終盤	香港	基隆	基隆	福州	○
			3	南支沿岸遊歴班	○	○	終盤	広東	高雄	基隆	福州	○
			4	南支印度支那台湾遊歴班	×	○	終盤	広東	高雄	基隆	福州	○
			5	南洋諸島遊歴班	×	○	序盤	福州	基隆	基隆	マニラ	○
29	1932	27	1	第21班	○	○	全般	厦門	高雄	基隆	門司	○
30	1933	32	1	南支沿岸台湾調査班	○	○	全般	厦門	基隆	基隆	門司	○
			2	南洋調査班	言及のみ	○	序盤と終盤	1福州 2香港	1基隆 2高雄	1基隆 2基隆	神戸	○
31	1934	26	1	南支沿岸遊歴班	○	○	終盤	厦門	高雄	基隆	不明	○
32	1935	22	1	湖南省・江西省遊歴班	×	×	終盤	厦門	高雄	不明	不明	○
			2	福建省・広東省遊歴班	○	○	終盤	香港	基隆	基隆	上海	○
			3	江西省・仏領印度支那遊歴班	×	○	終盤	厦門	高雄	基隆	不明	○
33	1936	25	1	広東省遊歴班	○	○	序盤	福州	基隆	高雄	厦門	○
			2	海南島調査班	×	○	終盤	厦門	高雄	不明	上海	○
			3	広西省遊歴班	言及のみ	○	終盤	厦門	高雄	基隆	上海	○
			4	フィリピン遊歴班	×	○	序盤	上海	基隆	高雄	マニラ	○
34	1937	29	1	第15班(湖南省)	×	×	序盤	上海	基隆	高雄	広東	○
			2	第21班(福建省)	(無)	○	序盤	上海	基隆	高雄	福州	○
			3	第22班(福建省)	(無)	○	終盤	広東	高雄	基隆	上海	○
			4	第23班(広東省)	(無)	○	序盤	上海	基隆	高雄	汕頭	○
			5	第24班(広東省)	(無)	○	序盤	上海	基隆	高雄	香港	○
			6	第25班(広東省)	言及のみ	○	序盤	上海	基隆	高雄	香港	○
			7	第26班(仏領印度支那・暹羅)	×	○	終盤	サイゴン？	基隆	不明	上海	○
			8	第27班(フィリピン)	×	○	序盤	上海	基隆	高雄	マニラ	○
35	1938	30	1	南支・南洋・暹羅方面旅行班・第1班(南支台湾)	○	○	序盤	上海	基隆	高雄	香港	○
			2	南支・南洋・暹羅方面旅行班・第2班(マレイ)	×	×	序盤	上海	基隆	不明	海防	○
			3	南支・南洋・暹羅方面旅行班・第3班(暹羅)	×	○	序盤	上海	基隆	基隆	海防	○
			4	南支・南洋・暹羅方面旅行班・第4班(南洋)	×	○	序盤	上海	基隆	高雄	マニラ	○
36	1939	21	1	(不明：華南沿岸)	○	不明	終盤	広東	高雄	不明	上海？	(無)
38	1941	32	1	第10班(江蘇省)	×	×	終盤	上海	基隆	基隆	厦門・上海	○
			2	第23班(福建省)	×	不明	全体	1上海 2広東	1基隆 2高雄	12基隆	1厦門 2上海	○
			3	第24班(福建省)	×	不明	序盤と終盤	1上海 2広東	1基隆 2高雄	12基隆	1厦門 2上海	○
			4	第25班(福建省)	×	不明	序盤と終盤	1上海 2広東	1基隆 2高雄	12基隆	1厦門 2上海	○
			5	第26班(広東省)	○	不明	序盤	上海	基隆	基隆？	厦門	○
			6	第27班(広東省)	○	不明	序盤と終盤	1上海 2厦門	1基隆 2高雄	12基隆	1広東 2上海	○
			7	第28班(広東省)	×	不明	中盤	厦門	基隆	基隆	上海	○
			8	第29班(広東省)	×	不明	序盤と終盤	1上海 2広東	1基隆 2高雄	12基隆	1厦門 2上海	○
			9	第30班(広東省)	×	不明	中盤	広東	高雄	基隆	上海	○
			10	第31班(広東省)	○	不明	序盤と終盤	1上海 2広東	1基隆 2高雄	12基隆	1厦門 2上海	○
40	1942	38	1	第38班(香港)	言及のみ	○	序盤	上海	不明	不明	広東	○
			2	第38班(香港)	言及のみ	○	序盤	不明	不明	基隆	厦門	○

表２は、台湾を訪問したルートの一覧である。「報告書での取り扱い」では、各報告書の中で台湾がどのように扱われているのかを記した。数行から数ページまで、台湾訪問について何らかの記述がなされている場合は「〇」としている。「×」は、記述が無く、かつ次に述べる「言及」も無い場合である。

「記述」がある場合でも、たとえば旅行の最後に台湾に立ち寄ると触れる場合も少なくなく、そうした場合は「言及のみ」として計算した。たとえば「言及のみ」の典型的な例として、第 6 期生・1908 年「楚粤班」による報告書「楚山粤水」を挙げることができる。この報告書では、報告書最終ページの最後から 2 行目の箇所で、「香港より或ものは臺灣に向ひ或ものは歸滬し或もの此に駐る、三个月の旅は此に終れり」として、台湾訪問が調査終了後の寄港地の一つとして挙げられている。

「香港通過」では、一大ハブであった香港を通過したルートかどうかをカウントした。後述するように台湾を訪問するルートの多くが華南一帯や東南アジアまで及ぶ広い範囲を移動しており、その中での台湾での位置付けについて考察するためである。

「訪問順序」では、ルートの中のどの時期に台湾を訪問したのかを示している。一回の調査で台湾を二回訪れた班もあるので、その場合は「序盤と終盤」というように両方記している。

「台湾前」、「入台地」、「出台地」、「台湾後」は、ルート内での台湾の位置付けを把握するために加えた項目である。一回の調査で二回台湾を訪問した場合は「１福州２香港」や「１基隆２高雄」というように、何回目の台湾訪問でどこからどこに入国あるいは出国したのかが分かるように記録している。

最後に「一覧内での扱い」は、記載されたルートリストに台湾訪問が記載されているか否かを示している。

Ⅲ．考察

１．台湾訪問ルートの推移

大旅行における台湾訪問をルート数の推移から眺めた場合、すでに別稿でも指摘したように、毎年のように大きな増減を繰り返しつつも、1930 年代に一定の盛り上がりを示している（岩田、2015：62 － 63）。

名称に直接「台湾」を加えた班には、「南支印度支那台湾遊歴班」（第 28 期生・1931 年）、「南支沿岸台湾調査班」（第 30 期生・1933 年）、「南支・南洋・暹羅方面旅行班・第 1 班（南支台湾）」（第 35 期生・1938 年）の三つがある。これらの班はいずれも 1930 年代に大旅行調査を実施している。

また、ルートが主に台湾で構成されているものとして、第 29 期生・1932 年の「第 21

班」、上述第 30 期生「南支沿岸台湾調査班」、そして第 38 期生･1941 年の「第 23 班（福建省）」の各ルートがあるが、これらも 1930 年代およびその直後となっている。

ただしこの時期に総ルート数の面でも増加と言える推移が指摘できるのも事実だ。藤田が指摘する「制約期」（藤田、2011：67）の中での台湾訪問の位置付けや大旅行と南進論との関わりの側面に焦点を当て、台湾訪問ルートの詳細や記述内容を含めたさらなる分析が必要である。

２．南方調査への組み込み

台湾を訪問した班の名称に着目すると、台湾訪問が広義の華南や東南アジアを含む地域、つまり南方方面のルートの一部に組み込まれていたことが分かる。

上述の「台湾」を班名に加えた 3 班の各名称には「南支」、「南支沿岸」、「南洋」、「印度支那」、「暹羅」といった南方の諸地名が含まれている。このことには大旅行調査における台湾の地理的位置付けが端的に表れていると言えよう。

また個々の省名を用いた班名でも、福建省をはじめとして、華南一帯の省名を持つものが多い。まれに第 28 期生・1931 年の「南支沿岸遊歴班」が満州や朝鮮半島にまで足を延ばした班もあるが、基本的には南方方面におさまるルートばかりであったとかんがえてよい。

台湾訪問を含むルートの中には上海を起点に華南地域を周遊するものが少なくなかった。華南内陸部から調査を始め左回りに進むルートには、たとえば第 6 期生・1908 年の「楚粤班」のものがあり、同班は上海→漢口→長沙→永州→桂林→梧州→広東→香港（一部省略）というルートをたどり、香港後に台湾に立ち寄っている。

逆に沿岸部を南下する右回りの例として第 16 期生・1918 年「両広湖南班」のルートを引くと（図２）、上海→福州→台湾→厦門→香港→広東→梧州→桂林→長沙→漢口→上海（一部省略）となる。華南沿岸部はこうした周遊ルートで一つの弧を構成していた。

また、華南沿岸部は、上海と広東方面や東南アジアを往復するルートの一部としても利用された。いずれにしても、台湾はこれらのルートの中で頻繁に通過された、あるいは立ち寄られた地点であった。

台湾が南方方面の大旅行調査の中に組み込まれていた事実は、台湾を訪問したルートのほとんどで香港も訪問地になっていることからも分かる。香港は、ルートが華南周遊か広東方面か東南アジア方面かにかかわりなく、南方方面へのルートでごく普通に訪問対象となっていた一大ハブであった[4)]。台湾訪問ルートの中でも、ルート内容が確認できるもののうち約 9 割が香港も訪問している。

4）大旅行調査における香港については（塩山、2015）を参照。

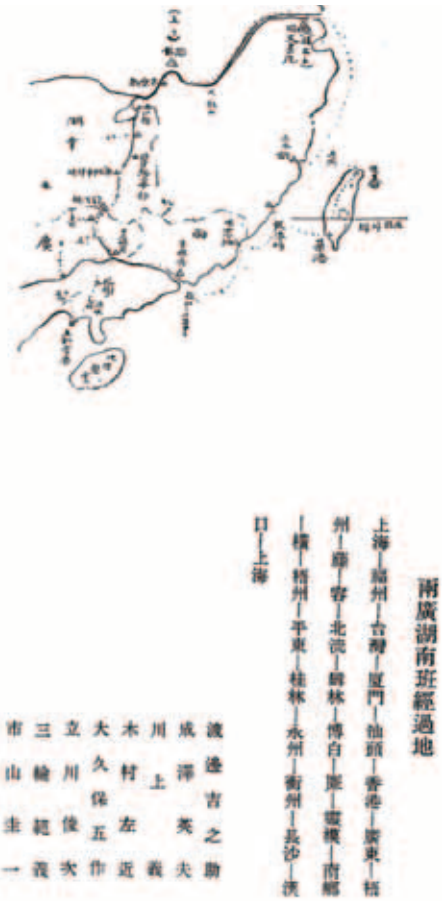

図２　第 16 期生・1918 年「農工科四班」の調査ルート

３．南洋フィリピンへの通過点

このことと関連して、台湾が大旅行調査におけるフィリピン（さらには東南アジア島嶼部）への入り口になっていたことも興味深い。合計で 6 班、すなわち第 22 期生・1925 年「南洋華僑調査班」、第 26 期生・1929 年（班名不明）、第 28 期生・1931 年「南洋諸島遊歴班」、第 33 期生・1936 年「フィリピン遊歴班」、第 34 期生・1937 年「第 27 班（フィリピン）」、第 35 期生・1938 年「南支・南洋・暹羅方面旅行班・第 4 班（南洋）」が台湾からマニラに渡航している。たとえば第 28 期生のように、フィリピンからさらに南下し、ボルネオ島やオランダ領インドネシアを周遊したルートもある（図３）。

逆にマニラから台湾に入るルートは一つしかない。第 19 期生・1921 年「南溟航運調査班」は、上海から華南沿岸、インドシナ半島、シンガポール、オランダ領インド、ボルネオ島、そして香港に戻った後に２グループに別れて、一部は直接台湾へ、もう一部はマニラ経由で台湾入りしている。

南洋諸島遊歴班

經過地

上海—福州—基隆—台北—基隆—マニラ—ボアオ—スラバヤ—パスルアン—スマランジ—ソロ—ヴロクロ—ヤーパンドン—ガルーパ—ビヤーガン—ロンカロン—パレンバン—シンガポール—香港—廣東—汕頭—上海

小島號

正林秀夫

加藤和夫

図３　第 28 期生・1931 年「南洋諸島遊歴班」

台湾フィリピン間の移動は、他の東南アジア地域へのルートと同様に、大旅行調査と南進論との関連を考察する上で興味深い部分だといえる。ただし、フィリピンを訪問した全班が台湾を経由していたというわけではないことも断っておく必要があろう。東南アジアに関する大旅行調査についての加納の研究と比較対照すると（加納、2015：42）、本稿表 2 に記載されていない班として第 24 期生・第 25 期生・第 36 期生の 3 班があることが分かる。たとえば 24 期生・1927 年の「比律賓華僑調査班」は香港マニラ間の直行便を利用している。

４．基隆港の重要性

台湾を出入りする際に最も利用されたのは基隆港であった。入台地と出台地とでは後者に不明な場合が多いので、入台地についてのみカウントすると、入台回数は全 88 回

になる[5)]。そのうち基隆港を利用したものは 51 回と最多である。

第 2 位は高雄港の 21 回である。高雄港への出発地の中では、「不明」の２例をのぞいて、高雄港への出港地の全てが「広東」になっていることは興味深い。高雄・広東の両港間を旅客船が頻繁に行き来していたことが推測される。

また一例だけであるが、第９期生・1911 年のように、基隆港の整備が進む前に厦門から淡水港経由で入台したルートもある。

5. “ご褒美”としての性格

最後に、大旅行誌において台湾がどのように扱われているのかを、記述の有無の点から探ってみよう。

表２が示すように、台湾訪問について全体の半分強で何らかの記述があることが分かるのであるが、15 回の言及を、「記述あり」ではなく「記述なし」と同じカテゴリーとしてカウントすることもできなくはない。前述のような寄港だけを告げるような記述は、“調査報告の中で本質的に重要ではないもの”とみなすことは十分に可能だからである。

さらにいえば、「記述あり」の場合でも実際には「言及」と大きく変わるわけではない淡白な記述である場合も存在する。たとえば第 26 期生・1929 年の報告書「楊旅」（班名不明）では 13 行を台湾滞在７日間に当てているが、記述の内容はほぼ全て台湾滞在中に病に伏せていたことについてのものとなっている。

上述のように台湾という地名を班名に含む班は 3 班しかない。また、そもそも大旅行調査において台湾訪問が主たる調査対象地になることは数えるほどである。その一方で、書院生らは大旅行中でも機会が許せば「日本在住時の食習慣への執着」（須川、2015：65）を示し、「きちんとした日本旅館を好んで利用して『日本』を味わっていた」（塩山、2015：56）。そして、別稿で論じたように書院生にとって台湾とは“支那とは異なる日本”だったのであり、また調査終盤に台湾を訪問した者の中には台湾を「吾日本の地」、「懐かしの故国」と描写する者も珍しくなかった（岩田、2015）。

これらのことを考慮にいれると、台湾訪問が終盤に据えられている場合、台湾が長く苦難に満ちた大旅行調査の打ち上げの場、あるいはそれを切り抜けた者が自分自身に授けるご褒美としての立寄り場所と考えられていたのではないかと推測できるのである。

Ⅳ. おわりに

以上、本稿では東亜同文書院・大旅行調査における台湾訪問について理解を深めるために、該当する全ルートを明らかにすると同時に、いくつかの観点から訪問のあり方に

5）第 30 期生・1933 年のように、一度の調査で２回入台しているケースがあり、その際は 2 回と計算している。

ついて考察を加えてきた。

台湾訪問ルートを抽出する作業を通じて把握できたことをまとめてみよう。第一に、班名やルートからは1930年代に台湾訪問が盛んになったことが伺える。第二に、台湾は、華南沿岸部の弧の一部として、南方への大旅行調査に組み込まれていた。第三に、それと関連することとして、台湾がフィリピンならびに以南への入り口の一つとして機能していた。第四が基隆港の重要である。最後に、台湾訪問が辛く長い大旅行調査の締めくくりをかざる“ご褒美”のような性格を持っていたのではないかと指摘した。

今回は、各ルートの報告書の内容にまで立ち入って分析することはしなかった。本稿の中で明らかになった論点には、内容分析によってさらなる理解の深まりが期待できる。台湾訪問の実情を、その記述内容に焦点を当てて、南方方面への大旅行調査全体の中で解明する作業は、今後の課題としたい。

【参考文献】

荒武達朗　2015「『東亜同文書院大旅行誌』から見た満州の日本人」『同文書院記念報』VOL.23 別冊①
岩田晋典　2015「東亜同文書院大旅行調査と植民地台湾：書院生が経験した『日本』」『同文書院記念報』VOL.23 別冊①
加納寛　2015「書院生、東南アジアを行く！！：書院生の見た在留日本人」『同文書院記念報』VOL.23 別冊①
塩山正純　2015「『大旅行誌』の思い出に記された香港」『同文書院記念報』VOL.23 別冊①
須川妙子　2015「『大旅行誌』の食に関する記載にみる書院生の心情」『同文書院記念報』VOL.23 別冊①
東亜同文書院（編）　2006『東亜同文書院大旅行誌』シリーズ（雄松堂オンデマンド）
藤田佳久　2011『東亜同文書院生が記録した近代中国地域像』ナカニシヤ出版
藤田佳久　2012『日中に懸ける：東亜同文書院の群像』中日新聞社